

## 八日目の蝉（2）

実の親が幼い子を虐待して殺してしまうという、悲惨な事件が後を絶ちません。母性というものに力が無くなってしまったのだろうか、暗澹たる思いがします。親になり得ない、親になってはいけない者が親になってしまう悲劇、その悲劇は、生まれてきた子にとっての悲劇であると同時に、親となってしまう者にとっての悲劇でもあります。

しかし、よく考えてみると、そもそも子どもを産んだからといって自動的に母性が発揮できるようになると考える方がどうかしているのかも知れません。

ですから、生みの親でないにもかかわらず、薫に対して無償の愛ともいうべき母性を注ぎ込む野々宮希和子を見ると、切なくなってしまうます。

もとより、誘拐された薫こと秋山恵理子やその親達のことを忘れてはいけません。野々宮希和子は、幼児を誘拐することによって自ら他の蝉とは違う道を歩き始めますが、秋山恵理子やその親たちは幼児誘拐の被害者となったことによって、決して望んではいなかった八日目の蝉として過酷な人生を生きていくことになったのですから。

更に、警察によって保護され、親元に戻った薫は秋山恵理子として成長しますが、特異な人生経験は彼女の心を屈折させていきます。そして、自分もまた、愛人との間に子どもを宿すことによって、自ら八日目の蝉になっていくのです。幼児誘拐の被害者が誘拐犯と同じ生き方を選択してしまうというのは何故なのだろうか、親ではない人の影を見続けてきたせいなのだろうかと感じます。救いがたいようにも思えますが、千草という恵理子の友人は、彼女

に「8日目に生き残った蝉の方が悲しいというのは違うかも知れない。何故なら、8日目の蝉は、他の蝉には見られなかったものを見られるのだから。見たくないと思うかも知れないが、でも、ぎゅっと目を閉じていなくてはいけないほどひどいものばかりではないと思う。」と語ります。

子どもを墮ろそうと思っていた恵理子は、降りたこともない駅で降り、飛び込んだ産婦人科で白髪の子産婦人科医が「緑のきれいなところに生まれるねえ」というのを聞いて、一瞬にしてその気持ちが吹っ飛びます。彼女は、生まれてくる子は「目を開けて、生い茂った新緑を真っ先に見なくちゃいけない」と決意します。

一方、野々宮希和子は懲役8年を言い渡されます。刑期を終えて出てきた彼女は、子育てという喜びの記憶以外手元に何も残されていない絶望の淵にいたにもかかわらず、立ち寄ったみすぼらしい食堂で出されたラーメンを「おいしい」と感じる自分を発見して、「まだ、生きるしかない」と感じます。

母となる道を選んだ恵理子、4年間とはいえ子育ての喜びが身体に残っている希和子は、8日目の蝉として、きっと何かよいものを見るに違いない、そんな予感を感じさせます。(完) (塾頭 吉田 洋一)